黒い魔道士さんの物語

古時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い魔道士さんの物語

【Ｎコード】
Ｎ７７３４Ｖ

【作者名】
古時計

【あらすじ】
呪われた黒い魔道士さんは人間兵器だった少女と共に、今日も愉快に広い世界で旅をする。
彼らはこの旅で一体何を得るのだろうか？
初投稿です。よろしければ、見てやって下さい。

プロローグ1（前書き）

初投稿です。

プロローグ1

「あれだな。今日は絶好の洗濯日和だな」

雲一つない晴れ渡る碧い空の下、目に傷などがあるいかつい男達の前でいかにも気怠げな青年、アジェット・グリースは呟いた。

彼なりのこだわりなのか、それとも起きた時から直していないのか威勢よく跳ねている髪。あまり良いとは言えない目つきの深い黒色の瞳。何が気に入らないのか不機嫌そうに立っているやや細身のこの青年は別に主婦というわけではない。

先程から、目の前にいるいかつい顔の男達は頭に青筋を血管がはちきれんばかりに浮かべている。さらに彼らは手に何やら物騒な代物、斧やら剣やらを持っていた。

目を離せばすぐにでもにもアジェットに襲いかかりそうな勢いだ。まぁ、目など最初から合わしてはいないが。

普通なら、主婦でもこんな時に天気のことなど気にも止めないだろう。

「ああん？　馬鹿にしてんのか小僧？」

「今日の晩飯は、肉料理がいいな。近くに店あるのかな。次の国の名物って何だろ？　肉料理だったりしてくれたらかなり嬉しいんだけどっ！？」

男達の方を全く見ずに顎をさすりながらそんな事をアジェットが呟いた刹那、

彼の体は強く殴り飛ばされ、宙を舞った。

男達の手によってではなく、突然現れた一人の少女の手にによって。

明るい栗色の肩を少し超えるぐらいの髪の毛を揺らしながら登場

した少女は、地面に叩きつけられたままのアジェットに近づいていく。

「あんた、いつまで寝てんのよ」

冷たい声が頭上に響いた。

それでもアジェットはピクリとも動かない。死んでしまったかのようにぐったりと地面に転がっている。

つり上がっている眉が気の強さを表している少女は無理やり作ったような歪な笑顔を浮かべ、腰に差してあった剣を抜いた。

よく見ると口元がひくついてる。

「ちょっ！？　待った、待った！！　死ぬから！！　それはマジで死ぬから！！」

屍のように地面に転がっていたアジェットが元気に飛び起きて少女を宥める。

が、もう一度殴られた。というよりは斬られた。

「大丈夫よ。峰打ちだから」

「理不尽だあぁ！！」

ロングソードに峰などあるのだろうか？まぁ、鞘がついているから大丈夫なんだろうけども。

その様子を見ていた男達がニヤニヤと品の無い笑いを浮かべ、少女に声をかける。

「威勢のいいお嬢ちゃんだな。そっちのもやし男より、よっぽど男らしいぜ」

少女は男達を不機嫌極まりない目で一瞥した後、アジェットを睨みつけた。

「あんたのせいで、か弱い乙女の私が男扱いされたじゃない！！」

地面に倒れ込んだアジェットは余所を向いたまま小さく呟く。

「どこにか弱い乙女なんかいるんだか」

「なぁに？　よく聞こえなかったわ。もう一度言ってご覧なさい、アジェット」

満面危ない笑顔のか弱い乙女は男達をほうったままアジェットに近づき腕を捻りあげた。

「ちょっ！？　待っ……ギブ、ギブ、ギブ！！」

悲鳴をあげるアジェットの腕を放してから深い溜め息をつき、少女は言った。

「ハァ。ほら、立って。あの雑魚共を5秒でしばくわよ」

憤慨して、今にも殴ってきそうな男達をこれまた無視してアジェットはゆっくりと立ち上がり、着ている黒いコートについた埃をはらい、身嗜みを整え始める。

だが、いかつい顔の男達はそれが終わるのを待ってはくれず、

「ふざけんなや、ゴラァッ」

あっさりと一人が殴りかかってきた。

「おいおい、あと少しぐらい待ってくれよ」
「なっ！？」

アジェットはそれを片手で軽く受け流し、軽く足を払っていかつい顔の男を地面に転がす。
仲間がどう見ても強そうには見えない男に軽くあしらわれたことに驚愕してこちらに向かってくる足を止めている残りの男達を見て、アジェットは深い、実に深い溜め息を吐いた。

「ああ、何で俺達はこんな変なのにばっかからまれるんだ？　戦闘とかだるいから嫌いだし、入国したてで疲れてるんだけどなぁ」

だるそうに頭をかくアジェットの体が淡く発光する。

「お、お前神の奇跡を行使できるのかっ！？」

男達の顔が引きつり、その中の一人が悲鳴のような声で言った。

「え？　神の奇跡？　いや、俺のはそんな大層なもんじゃなくて魔法っていうんだけど」

アジェットは思わず顔をしかめた。

「だ、大丈夫だ。詠唱さえさせなければ神の奇跡は行使できないはず！！」

目の色を変えた男達がアジェットに一斉に飛びかかる。
相変わらずだるそうな表情を浮かべたアジェットは一言。

「リーラ、よろしく」

「分かってるわよ！！」
アジェットに言われる前に動いていたリーラが向かい来る男達の前に立ちふさがった。
「って、頼むまでもなかったな。いや～、悪い。もう完成しちまったわ」
「え？」
巨大な竜巻が彼らの前に突然現れて男達を巻き込んでいく。
「うおぉぉぇぇぇ！？」
「呪文名は……えっと、何だったっけ？　忘れたや。まぁ、構成さえ覚えとけば使えるからいいんだけどさ」
男達の間抜けな悲鳴の横でぼさぼさの髪をかきながらアジェットが前を見た瞬間。
彼は固まった。
そして青ざめた顔に引きつった笑みを浮かべてぎこちなく方向転換する。
そんな彼の肩を後ろから掴む者があった。
「あらぁ、アジェットさん？　一体どこに行かれるのかしら」
先程発生させた竜巻はアジェットより前の者、すべて（・・・）を巻き込んでいた。
彼の前には男達の他に誰がいた？
そう、彼女だ。
彼の背後には自分より髪がぼさぼさになってしまったリーラがいた。

彼女の顔にはりついている笑顔が怖い。

「え？　えっとぉ、早く次の国に入国したいなって思ってさぁ」

アジェットの歯が震えて、ガチガチと五月蝿く音をたてている。

「そんなに急がなくてもいいのよ？　まだまだ時間はあるから。もっとも……」

「も、もっとも？」

アジェットは聞き返す。小さな希望を携えて。

「あんたに残された時間は残りわずかだけどねぇぇっ！！」

「マジですいませんでしたぁぁっ！！」

五分後、アジェットは自らの魔法で吹き飛ばした男達の山に加わっていた。

「ああ……なんでこんなことに……」

最早哀愁漂う感じの傷だらけの彼は碧い空を見上げながら呟いた。

「あんた何で倒れてんのよ？　ほら、さっさと行くわよ」

お前のせいだよ！　という言葉をぐっと飲み込み、アジェットは立ち上がる。

「じゃあ行くか。と言いたいところだけどさぁ。今日は疲れてるし、

もう休まねぇ？」
「休まない。というより休めない。あんたここどこだと思ってんのよ？　国境超えて少しの山道よ」
「マジで？　まだ国境越えてなかったの？　じゃああいつら住民じゃなかったの？」

アジェットは驚いた表情を浮かべて先程の男達を指差す。

「どっからどう見ても盗賊でしょうが！！　あんたは今まで何を見ていたのよ！！」
「うーん。風景？　しかたない、じゃあとりやえず今日は野宿に……」
「しないわよ！！」

乾いたいい音がした。
思いっきり頭を叩かれたアジェットは頭を押さえてる。

「叩くことないじゃんかよ」
「あと一時間も歩けば王都に着くんだからそれぐらい歩きなさいよ」
「その一時間がめんどくさいんだよ。だいたい入国してしばらくは道が続くってここはど田舎か！！」
「あんたねぇ」

溜め息をついて、リーラは地面に座り込もうとするアジェットの背中を押す。
アジェットも渋々ながら足を動かし歩み始めた。
歩いてるうちにアジェットはだんだん猫背になり始め、終いには彼のお腹は盛大に音をたてた。
「なぁ、リーラ。王都に着いたら肉料理食おうな」

その捨てられた子猫みたいな視線にリーラは苦笑する。
アジェットの今の発言のせいで一番思い出したくないことを思い出したのだ。

「別にいいけど、今、私達金欠よ。多少はあるけど、節約したいわ」
「えっ！？」

アジェットが硬直する。

「旅ってけっこうお金かかんのよね。減る一方でまったく増えないし」

青ざめた顔で無理に笑顔を作ろうとしてニンニクの臭いを嗅いだ吸血鬼みたいな顔になったアジェットが恐る恐るリーラに尋ねた。

「それは悪い冗談ですよね、リーラさん？」
「ほんと、そうだといいわよね」

遠い目をして答えるリーラを見て、泣きそうな顔をしてアジェットはガックリと頭をうなだれさす。

「マジかよ。魔道四輪を買おうと思ってたのに……」
「次の街で稼げばいいんじゃない？」
「そっか！！　そうだよな！！　じゃあ、リーラよろしく！！」
「あんたも働くのよ！！」
「え～、リーラ一人でいいだろ！！」
「いい訳ないでしょ！！」
「リーラの鬼ー！！」
「鬼じゃない！！」

二人はそんなやる気にいまいち欠ける会話をしながら歩き続けるのだった。

プロローグ1（後書き）

感想等くださると嬉しいです。

黒い魔道士さんと透明な神様の楽園　プロローグ

何も見えない。

暗い。真っ暗だ。

怖い。辛い。不安で仕方ない。

助けて欲しい。誰か助けて。神様……

と、そこで少女はしっかりと目を見開き前を見た。

が、何も変わらぬ現実がそこにはあった。目を閉じる前と全て一緒。何も変わらない、彼女にとっては辛い現実。

だが、彼女はもう目を閉じるつもりはなかった。

透き通った瞳で前を見据える。

――私がやらないと

思いとは裏腹に震え続ける足を無理やり動かし目の前の階段を上がる。

一段一段。

ゆっくりと、でもしっかりと。

頬を伝う涙を気にも止めず、上がり続ける。

ふと前を見る彼女の目に、この国の神のシンボルマークである三日月が目に入

り足を止めた。

もう一度だけ、と少女が小さく呟く。

今日が最後だからもう一度だけ。

今にも壊れてしまいそうな震える声で彼女は祈りを捧げた。

神に。

黒い魔道士さんと透明な神様の楽園　プロローグ（後書き）

感想等くださると嬉しいです。

黒い魔道士さんと透明な神様の楽園　第一話

「神様ねぇ……」

気怠げな表情を携えた瞳であまり興味なさそうにアジェットは前を見ていた。

彼の目の前には念願の肉料理が置かれている。

ただ、残念なことにかなり値が張った割にあまり豪華ではない。

ざっと見ただけでもこの国を少し見た感じでは生きていくだけで精一杯の人も

少なくないように見えた。

あまり豊かな国ではないようだ。

「どうかした？」

隣のリーラがアジェットの顔を覗き込む。

相変わらずしゃきっとしない相方の顔を。

「この国についてからなんか神って言葉をやたら聞くような気がするんだよなぁ

」

鉄製のフォークで肉の塊をつつきながらアジェットは呟いた。

「仕方ないじゃない。宗教国家なんてみんなこんなもんよ」

リーラの言葉にまぁ、そうだよな。とアジェットは納得する。

彼らは今、宗教国家、ライエルに来ていた。

この宗教国家ライエルは、万物の神ギレアンという神様を信仰しており、この国の王はそのギレアンに選ばれた神の代理人としてこの国を統治しているらしい。

「なんかなぁ、神様って信じられねぇんだよな」

神様なんて定義曖昧な存在を信じろなんて言われても、あいにくと信じれるような環境で育たなかったアジェットにはどうも信じることができない。

目の前の肉料理と信仰によって得られる幸福どちらを取るかと聞かれると迷わず肉料理を取ってしまうアジェットである。

寂しい奴と言われるかもしれないがそういう性分なので仕方がない。

「別にいいんじゃない？　信じる信じないは人の自由だし。まぁ、この国の人は信じないといけないみたいだけど。都合のいいことに私達は旅人だしね」

「でもよ、気分的には旅先の国ではそこのルールに従いたいじゃん？　浮かないためにもさ」

「それについては心配ないわよ。もう十分浮いてるから」

リーラは目で辺りを示した。

なるほど、彼らは周りからやたらと注目をされている。

数多の視線を受けていることに気づいて若干顔が引きつったア

ジェットは首を
傾げた。

「何で俺達注目されてんの？」
「あんたがそんな目立つ恰好してるからよ」

辛辣なリーラの言葉にアジェットは反論する。

「いやいや、リーラさんよ。俺達ほぼ同じ恰好だと思うんだけど？」

アジェットの言うとおり彼とリーラの服装は二人とも全身黒で
コーディネート
された似たようなものだった。
強いて言うなら、リーラの首もとには可愛らしく赤いリボンが
ついている。
赤いリボンが彼女の綺麗な緑色の目に合っていて可愛かったりす
るのだが、そ
れは今は置いといて。
この二人の服装のどこがおかしいのかというと、簡単に言って
仕舞えばこの国
の人間と違う恰好をしているということだった。
二人が今いるこの国、ライエルでは特殊な催しがない限り人々
はフード付きの
黒以外の色のローブを羽織っているのが普通だ。
対して黒いロングコートを羽織っている二人は非常に目立って
いる。
まずいことに万物の神ギレアンの象徴は月であり、黒色は月食、
つまり神無き
夜を象徴するものとして身につけることは嫌われていた。
そんなことを知らぬ二人は黒いロングコートを着てただ首を傾

げている。

「まぁ、旅人だから目立つのは当然なんじゃない」

「そうだな、目立つのは旅人の性だ」

うんうんと頷くアジェットだが、本音を言ってしまうとこの視線はどうにかして欲しかった。

まったく、食いにくいったらありゃしない。

「なぁ、リーラ」

「ん？」

「この国に俺が探してるもんあると思うか？」

「さぁ？　見つかるといいわね」

リーラはどうでもよさげに答える。

どうやら今はそんなことより目の前の肉料理と格闘していたいらしい。

「冷てぇな」

アジェットが苦笑していると突然周りの雰囲気がガラッと変わった。

「騎士団だ！？」

誰かが叫んだ。

悲鳴のような声があちこちから上がる。

「騎士団か！？」

アジェットは騒ぎのする方に視線を向けた。
なるほど、確かにそれらしき人間達がいる。彼らは青の布地に金色で三日月の刺繍が入ったローブを着ていて、腰には何やら特殊な剣をぶら下げていた。
その腰に下がっている剣を見て、アジェットは心底嫌そうに顔をしかめた。

「……機械剣か」

機械剣とは、普通の剣とは違い、剣に機械仕掛けがついている剣で、戦闘中に変形させたり、磁力を発生させたり、刃から火が出たりする随分と便利な剣だ。
機械仕掛けだけならまだいいのだが、最近はそれに魔法の加護までついているやつもあるという。まだ、噂でしか聞いたことがないのでないかもしれないが。

「随分といいものもってるじゃない」

機械剣がそんなに便利なら全ての剣は機械剣にした方がいいんではないのかとも思えてくるが、機械剣には一つ問題がある。
そう、やたら値が張るのだ。
そんな高い剣を騎士全員に装備させれるほど豊かな国ではないように見えたのだが。

「騎士団とはいえ一般兵に機械剣持たせるなんて、いったいいつからこの国は軍
事に力を入れるようになったんだよ？」
「一年程前、王妃様がなくなった時からだよ」

アジェットの皮肉に答える者がいた。
声がした方を向くとそこには赤みがかった金髪のわりと若く見える男が座って
いる。
周りが混乱した中で彼はやたらと落ち着いていた。

「あんたら旅人だろ？」
「ああ」
「入国審査大変じゃなかったか？」

変なことを聞いてくる人間だ。
入国審査なんてどこの国も大変に決まっている。

「そりゃあ、そうだろ」

その返事があんまりお気に召さなかったようで、男は少し眉間に皺を寄せた。

「いや、そうじゃなくてさ、他の国と比べての話だよ」
「んーと、どうだったっけ？」

どうにも、アジェットには入国審査の時の記憶があまりないようだ。
困ったのでリーラに助け舟を求めてみる。
アジェットの視線に気づいたリーラは即答した。

「大変だったわよ」
「そ、そうだったのか！？」
　驚くアジェットをリーラは睨む。
　そのことにアジェットは再び驚き、何か悪いことをしただろうかと考え初める
。
「主にどっかの誰かさんのせいでね」
「ちょっと前まではこの国の入国審査もそれほど厳しくはなかったんだけどね」
　男はどこか遠くを見ているような目をした。
「ほぅ」
「王様も随分と人が変わられた。軍事に力が入るようになったのもそれからさ。
そして……」
　そこで、男は言葉を止めた。
　騒ぎの音が大きくなったからだ。
「そんな！？　何かの間違いです！！　私は何にもしていません！！　ましてや、異端
だなんて！？」
「黙れ。これは王からの命令だ」
　騎士の内の一人が女性の手を掴み、その女性の子供らしき女の子は他の騎士に

拘束されている。

「お母さん！？　お母ぁさん！！　行かないで！！　お母さん！！」

必死に母親へと手を伸ばし泣き喚く子供を騎士がぶった。

騎士に無理やり引っ張られていく母親が何かを叫ぶ。

男は忌々しげに先程の言葉の続きを言った。

「異端狩りが始まった。それも根拠もいわれもない、無差別な異端狩りが」

言い切ってから男は気づく。

さっきまで隣にいた人物がいなくなっていることに。

アジェットは席から姿を消していた。

そのことに気づいていたリーラは深い溜め息をつく。

めんどくさい、めんどくさいと口では嘯きながらも自分から面倒な事へと次から次へと首を突っ込んでいくあの男、アジェットにリーラは一言、言葉を捧げた。

「あのお人好し」

◇◆◇

母親を連れて行こうとする騎士の前に一人の男が立ちはだかっ

た。
それは異端狩りが始まった最初の頃はよくあったことだが、今では全く無くなったことだ。
騎士は目の前に立ちはだかる者がいたことに驚いたが、すぐになぜまだそんな人間がいるのかを理解した。

旅人だ。

明らかにこの街では浮く恰好をしている。
偽善者が！！　と、騎士は心の中で目の前の男を罵った。

「愛する親子を引き裂くなんて、とんだ神様がいたもんだ」
「貴様に我らが神の何が分かる？　余所者はどいてろ」
「へいへい」

意外な事にあっさりと旅人はその言葉に従った。
そのことに満足しつつ、騎士は抵抗する女性を引っ張っていく。

「お母さん！！　おかあさあぁぁぁん！！」

後ろで喚く子供に苛立ちを覚えながらも騎士は少し先の場所に停めている自分
達の軍用車へと向かおうと急ぎ、足を踏み出した。

その瞬間に騎士はすっころんだ。
何故かという理由はすぐに分かった。
先程あっさりとよけた旅人、アジェットが足を引っ掛けたのだ。
騎士はこけた時に自分の体を庇おうと女性を掴む手も放したの

で、女性は逃げ
出して我が子の下へと走り出している。
「貴っ様あぁぁぁぁぁぁ！！」
腹がたった。無性に腹がたった。
剣を抜き、騎士はアジェットに斬りかかる。
対するアジェットは手の平を広げて、腕を前に伸ばすだけだった。
それだけの動作で風の槍が現れて真っ直ぐ飛び、直撃した騎士を吹き飛ばす。
「ぬぁっ！？」
転がっていく騎士を見て周囲のざわめきがヒートアップしてきた。
「神の奇跡だっ！？」
「あの旅人は神の奇跡を使えるぞ！？」
その様子を見て、他の騎士達の表情が変わってゆく。
あまり好ましくない表情へと。
「あ～、これってやっちまったってやつ？」
アジェットがへらへらと笑いながら呟いた。
「その通りだ」
騎士達の中をかき分けて、何やらこの部隊の隊長らしき男が現

れた。
立派な金色の口髭を携えた嫌みったらしいほど威厳がある男だ。
「あー、やっちまったな～」
「大人しく降伏してくれるとありがたいし、あまり手荒な真似もせんのだが」
男の申し出をアジェットは断る。
「いや～、それは無理だな」
「だろうな。しかし、魔術か。厄介だな。まずはそれから封じようか」
「ハ！？」
隊長がローブの懐から何かを取り出して、投げつける。
焦ってバックステップで後ろに下がり、顔を庇ったアジェットだったが、その
物体は激しく発光しただけで特には何も起こらない。
なのに。
「これでいい」
そう満足そうに男は頷いた。
「いや、今の何だよ？」
疑問に思ったアジェットは尋ねたが返事はなく、代わりに剣での突きが返ってきた。

「マジか！？」

しゃがんでそれを避け、魔法で反撃しようとアジェットは手を伸ばす。

だが、彼は目を大きく見開くことになった。

何も起こらない。

「えっ？」

彼の口から純粋に疑問符が出る。

「祓魔道弾って知ってるか？」

隊長格の男がアジェットに聞いてくる。

「周囲の魔粒子を一時的にまるごと消滅させる兵器だよ。もちろん、周囲にいる人間の体内の中にある魔粒子も含めてな」

頼んでもないのに、丁寧に説明までしてくれた。

勘弁してほしい。

「冗談だろ」

余裕がなくなったアジェットはじりじりと騎士達に囲まれていく。

「魔粒子がないと魔法は使えないってことぐらい分かるよなぁ？」

「クソッ」

アジェットは周りを見渡すが打つ手が見つからない。
相手は機械剣を持った物騒な騎士達。
こちらは丸腰。魔術は使えない。
勝敗は既に見えていた。

「ほんと、便利な道具だよなぁ？　魔法使い」
「……ああ、ほんと、便利な道具だよな」

それでもアジェットは拳を下ろそうとはしなかった。

◇◆◇

リーラは、アジェットが騎士達に拘束され連れて行かれる様子を見ていた。
囲まれても最後まで拳を下ろそうとはしなかったアジェットにリーラは悪態をつく。

「あの馬鹿」

自分とは何の関係もない者のために何も省みずに行動して。
ほんとに馬鹿なお人好しだ。
でも、馬鹿なお人好しは嫌いじゃない。

「おい、あんたのお連れさん、連れて行かれたぞ？」

男がひきつった顔でリーラに言った。

「そうね」

「助けに行かなくて良かったのか？」

「あの状況で私が出て行っても、私も捕まるだけでしょ」

淡々とした返事を返すリーラに男はなんともいえない顔をする。

「だが、あんたら仲間なんだろ？」

「だからこそ、私は行かなかったのよ。両方捕まったら助けることすらできないじゃない。それで？　何で王様は異端狩りなんて始めたの？」

先程までの話の続きを要求され、男は顎を撫でながら考え込んだ。

「……分からんな。噂によると、命を使った儀式をするとかなんとか。ただ、正確なことは全く分からん。分かるのはこの国も、王も、変わってしまったという事実だけだ」

「ふぅん」

リーラは自分の料理を食べ終え、アジェットの料理に突入していた。

「な、なぁ」

男が何やらそわそわしながら尋ねてくる。

「何？」

「お前のお連れさん、神の奇跡を使っていたよな？　代理人でもないのにどうやって使ったんだ？」
「神の奇跡？」

神の奇跡なんて言われてもリーラには心あたりがない。
いや、待てよ。そういえば道中でもそんな言葉を聞いたような気がする。

「ほら、お前のお連れさんがやってたあれだよ。風の槍のやつ」
「ああ、魔法のことね」

理解した。
少し邪魔に思った髪を片耳にかける。
少し興味が湧いてきた。

「魔法？　そんなもの存在するわけないじゃないか」

顔をしかめて男は首を傾げる。

どうやらこの国の国民は魔法の存在自体を知らないらしい。
まぁ、科学文化が発展した今の時代に魔法を使う者も使える者も人間にはあまりいないが、この国に全くいないなどありえない。さらには、魔道二輪などの乗り物などは恐らくこの国にもあるだろう。
それなのに何故、魔法の存在そのものを知らない？

「なら、魔粒子って知ってる？」
「魔粒子？　いや、知らんな」

なら、この国には魔道二輪や四輪はないのだろうか？

「じゃあ、魔道二輪ってこの国にある？」

「魔道二輪？　それはどんなものなんだ？」

「簡単にいえば空気中の魔粒子を吸収してエネルギーに変えて走るバイクなんだけど、まず魔粒子が分からないのよね？　えーと、分かり易く言えばあんまり速くないけどずっと走れるバイク」

魔道二輪も乗り手自身の魔力を流し込めばかなり速いスピードが出るのだが、それを言ってもややこしくなるだけだろう。

「あー、永道二輪のことか。あれは遅くてよう使わんな。たまに騎士団の連中があれで凄いスピードを出してるが原理が分からん」

名称が違うだけであることはあるのか。

さらに騎士の中には少なくとも魔法が使える者はいるらしい。

つまり、敢えて魔法の存在を隠しているということか。

リーラは一人でに結論づけた。

だが、旅人の中にも魔法が使える者はいただろうに。

一体何故？

「あー、もうっ！？」

「ど、どうした！？」

「別に何でもないわよ。ねぇ、あいつらが私の連れをどこに連行したか心あたり

ない？」
「ああ、それなら間違いなく王城だと思うぞ」
「その場所教えて貰えるかしら？」
「構わんが、やはり行く気か？」

色々気になる点はあるが、まずはアジェットを助けるのが先決だろう。
ここでじっとしているのも嫌だし、何よりあれがいないと旅が退屈なものにな
ってしまう。

リーラは笑顔で答える。

「ええ。もちろん」

黒い魔道士さんと透明な神様の楽園　第一話（後書き）

感想等くださると嬉しいです。

黒い魔道士さんと透明な神様の楽園　第二話

目が覚めるとそこは牢獄だった。

「わぁお、超優待遇」

アジェットは一人でに皮肉を言う。

石でできている床と壁に正面には鉄格子の殺風景な世界。
お情け程度にトイレと簡易ベッドが置かれている。
アジェットはそのベッドの上にいた。

「問題は魔力が戻ってるかどうかだよな」

手のひらに火の球を作り出してみる。
成功した。
どうやら体内の魔力は戻っているらしい。

「じゃあ、いつでも出れるってことか」
「あっ！？　起きられたんですね」

檻の外から声をかけられた。
即座に火の球を消して、薄暗い闇の中目を凝らす。

そこには知らない少女がいた。
腰より長い綺麗な金髪と大きな蒼い瞳が特徴的な少女だ。かなり整った顔をしている。
所々に金で刺繍がいれてある白いローブを着ていた。

「……絹（シルク）か」

ある程度身分が高い人間なのだろう。

少なくともこれで女牢屋番の線はなくなった。

「はい、確かに私はシルクです」

「だろうな。見たら分かる」

「えぇっ！？　見ただけで分かるんですか！？　凄いですね！！」

少女はひどく驚いていた。

牢獄に少女の声が響く。

「いや、そんなに凄いことでもないだろ」

「いや、凄いですって！！　見ただけで名前が分かるなんて！！」

え？　名前？　そんなもんいつ言ったっけ？　と、アジェットは首を捻る。

そういえばさっきこの少女は何と言っていた？

確かに私は（・・）シルクです。ではなかったか？

「あ、ああ。君はシルクっぽい顔してたからね。すぐ分かったよ」

「シルクっぽい顔ってどんな顔ですかっ！！」

適当に話を合わせながらアジェットは出口を探していた。

「さぁ？　どんな顔だろう？」

「あなたが言ったんじゃないんですか！？　まぁ、いいです。それよりあなたは神

の奇跡が使えるんですね！？　っということはあなたも神に愛された人なんですよ
ねっ！！」
「神に愛された人？」
「はい。神の奇跡を使える人は神様に愛されたからこそ神の奇跡が使えるんです
」
「なるほどねぇ。……しっかし、神様とやらはそんなにたくさんの人間を愛して
、ハーレムでも作る気かよ」

アジェットは頷いた。
この国では魔法は神の奇跡とされている。それは分かった。
だが、騎士団の人間は魔法を見て神の奇跡ではなく、魔法かと断言していた。
それを考慮してアジェットは結論をだす。

「……隠してるってことか」
「わ、私は何も隠してなんかいませんよ！？　べ、別に調理場からケーキを持って
来てこっそりとっていたりなんてしていませんよ！？」
「なに自分で暴露してんだよ？」
「あっ！？」

勝手に自爆して、やってしまったという顔をする少女を見てアジェットは笑う
。
「別に俺はケーキ取りにきた訳じゃないんだ。内緒にしとくから安心していいぞ

？」

そういうと同時にアジェットの腹が鳴った。

「あー、しまった。そういや飯ほとんど食わねぇままやられちまったんだった」

バツが悪そうにするアジェットに今度は少女が笑う。

「じゃあ、はいこれ」

少女はケーキを差し出してきた。

「えっ？　いいのか？　お前、楽しみにしてたんだろ？」

「本当は最近ずっとまともに食事もとってないお父さんにあげようと思ってとっていたんですけど。お腹がすいてる人が前にいたらほっとけないですから」

優しい笑みを浮かべる少女、シルクにアジェットは聞く。

「いいのか？」

「お腹すいてる人を放ってケーキをお父さんに渡したら、きっとお父さんに怒られちゃいますから」

そう言って笑いかけるシルクの申し出にアジェットは甘えさせて貰うことにした。

「ありがとな」

シルクからケーキを受け取る。

シルクは少し誇らしげに胸を張っていた。

「だって、私はこの国の姫ですから。万物神ギレアン様が幸せを届けれないとこ
ろには私が幸せを届けるのが務めです」

「っ！？」

アジェットは驚きのあまりケーキが乗った皿を手から落としそうになった。

「ど、どうしました！？」

アジェットは指を指して聞く。

「ひ、姫？」

「え、ええ」

「じゃあ、お父さんっていうのは、王ってことですか、姫？」

「そうですよ。あと、姫って呼ばないで下さい！！」

シルクが少し顔を赤くして叫ぶ。

それが面白くて、アジェットは悪ノリしだした。

「お、俺はなんて恐れ多い口の聞き方をしてしまったのでしょう！？　姫、お許し
を！！」

「別に気にしてません。だから、姫って呼ばないで下さい！！」

「し、しかし、ひ……」

「姫って呼ばないで！！」

顔を真っ赤にしてシルクが叫んだ。

アジェットは笑いながらも、へいへいと頷く。

この男、いつ不敬罪で処刑されてもおかしくない。

「やっと敬語はずれたな」

「へ？」

シルクがきょとんとした顔をする。

「いや～、俺堅苦しいの苦手なんだよね～。ほら、なんかめんどくさいじゃん？」

「そ、それだけの理由ですか！？」

「へ？」

シルクが自分を睨みつけているのをみて、アジェットは半笑いのまま固まる。

「それぐらいなら、言ったら直したのに、まったく！！　あなたって人は！！」

彼女の頭からは湯気でもでそうな勢いだ。

そんなに、姫と呼ばれるのが嫌なのだろうか？　本当にお姫様なのに。

「あ、あれ？　ひ、姫、もしかして起こってらっしゃいま……」

「姫って呼ぶなあぁぁっ！！」

「すいませんでしたぁぁぁぁぁっ！！」

「ふんっ」

全力で謝ったアジェットだが、シルクは頬を膨らませてそっぽをむいてしまった。

「しかし、めんどくさいことになったな」

目の前の少女、シルクは恐らくお人好しの部類に入る人間だ。この子の父親である王が異端狩りなんて物騒なことをしていることをこの子は知っているのだろうか？

アジェットがそんなことを考えていると。

グゥゥゥッ。

誰かのお腹がなった。

自分ではないことがアジェットは分かっている。

だとすると……

アジェットは目の前の少女、シルクをまじまじとみつめる。

シルクは耳まで真っ赤にして俯いていた。

「……ケーキ、半分ずつ食おうぜ？」

アジェットがフォークでショートケーキを半分に切り、苺の乗ってない方を手で掴んだ。

残りの半分を皿ごと少女に差し出す。

「ほい」
「……ありがとうございます」
「敬語になってるぞ」
「……ありがとう」

シルクは相変わらず俯いたまま皿を受け取った。

美味しいものは魔法より凄い。
食べているうちに誰もが笑顔になれるのだから。
シルクも食べ終わる頃には笑顔が戻っていた。
落ち着いたのを見てアジェットは口を開く。

「なぁ、少し聞いていいか？」
「何ですか？」

敬語、と言おうと思ったのだがめんどくさいのでアジェットはやめておく。

「何でお前の他に見張りがいない？」

そう、まずその点からしておかしいのだ。
何故お姫様一人に危険因子を任せる。

「分かりませんけど」
「あと5～6時間は何もできないだろうみたいなことを言ってましたよ」
「なーるほど。道具に頼りすぎたのか」

アジェットはほくそ笑む。

つまり、騎士団の人間はあと5～6時間はアジェットの魔力が回復しないと考
えていたらしいが、それが大きな誤算だったようだ。

「次に……」
「私からも一つ聞いていいですか？」
「ん？　ああ」

アジェットは少し驚いた表情を浮かべたが、すぐに頷いた。

「あなたは旅人なんですよね？　旅って、やっぱり楽しいものなんですか？」
「んー、どうだろう。確かに美しい景色や面白いことも沢山見れし、各地の美味
いもんも食えるけど、辛いことや苦しいこともいっぱいあるぞ？
でも、まぁ俺
はちょっと変わってるが頼りになる相棒もいるからな。まぁ、総合的に考えたら
楽しいよ」
「いいなぁ」

シルクが呟く。
姫という立場の彼女からしたら、旅人のように自由に国々を行き来できるもの
は羨望の対象なのだろう。
一般の人からしたら姫という立場も十分魅力的な気がするが。

「でも、旅には目的がないとな。目的のない旅はただ金を浪費するだけだから。
憧れだけで旅を始めると、しんどいことがあった時に挫折して途中

で放り投げちまう」
「そう……なんですか。あっ、質問、どうぞ」
「ああ、そうだった。なぁ、お前の親父さん急に性格が変わっちまったんじゃないか？」
「っ！？　どうして、それを知ってるんですか？」

シルクの手が若干震えている。

「街の噂で聞いた」
「……確かにその通りよ。一年ぐらい前から私が話しかけてもお父さん上の空みたいで、一回も笑ってくれないの。最初は、お母さんが亡くなったからだと思ってたんだけど、それにしては……」
「どこかおかしい？」

シルクは頷く。

「国民の怒りの矛先はほぼ全てが王に向かう」
「え？」
「なぁ、この国でお前ら王族以外で一番偉いのは誰だ？」

急にアジェットに肩を掴まれ驚いているシルクは少し頬を薄紅色に染めながら答えた。

「宰相のイグニルさんか、騎士団長のフレムさんです」

アジェットは目を細める。
「なんとなく分かってきたかもしれねぇ」
「何がですか？」
「んー、まだ秘密。今からそれを確かめに行く」
「へ？　どうやって？」

忘れちゃいけない。アジェットは牢屋の中だ。
「少し下がっといてくれるか？」
「分かりました」

シルクが下がったのを見届けて、アジェットは拳に炎を灯した。
とる手段は一つ。
「焼き斬る！！　ことは無理そうだから……ごめん。もう少し端に行ってくれる？
あー、なんかカッコつかねぇな」
「端、ですか？」

シルクが今度は端へと移動する。
「大きい音たてたらやっぱ騎士とか来るのよね？」
「来るような気がします。あー、でもここは地下ですし。どうですかね？」
「うん。じゃあ、俺が牢から出たらすぐに逃走な」
「……何する気なんですか？」
シルクの瞳には若干の恐怖の色があった。
アジェットは頭を笑って流す。
「まぁ、とりあえず走る準備さえしてもらえたらいいから」

「はい」
「よし、じゃあ早速、吹き飛ばしますか！！」
アジェットは牢の扉に向けて手を伸ばし、今日一番の笑顔を浮かべた。
彼の手のひらに現れた炎の球が真っ直ぐ飛んで行き、扉に当たる。
派手に爆音が響き、扉が吹き飛んだ。
「さぁ、行くぜぇ！！」

◇◆◇

リーラは道案内をして貰っている男と共に歩いていた。
「騎士がやたらうろついてるみたいだけど、いつもこうなの？」
「いや、昔はここまではいなかった。日に日に増えてきている。最近は特にだ。
でも、部隊で来ない限り異端狩りではないから大丈夫だぞ」
「ふぅん。それよりもっと早く歩けないの？」
「それは少し無理がある。今でもかなりきついからな」
歩いているうちにリーラはコートの袖を引っ張られていることを気づいた。
振り向いてもそこには誰もいない。

そこで下を向いてみるとそこには幼い少女がいた。

「お姉ちゃん、お花買って」

花のいっぱい入ったバスケットを見せてくる少女にリーラは微笑み、同じ目線の高さまでしゃがんだ。

「貰うわ。私に似合うお花を頂戴」

「えっとね、えっとね」

バスケットいっぱいにいれてある花の中から、白い花を取り出して少女はリーラに差し出した。

「お姉ちゃんにはね。これー！！」

元気に笑う少女にリーラもにこっと優しく微笑んで花を受け取った。

「ありがと。可愛いお花ね。はい、お金」

少女の小さな手のひらに丸型の金貨を一枚乗せる。

すると、少女は少し困った顔をした。

「お姉ちゃんお金多いよー。えっとね、みっちゃんね、こんなにお釣り持ってないの」

「うーん、私もその効果ぐらいしか持ってないのよ。じゃあさ。そのお金で買え

るだけお花をちょうだい」

少女は花の本数を数え始めた。

全部数え終えてから顔を上げるが、その顔はやはり困っていた。

「えっとね、えっとね。お花全部足してもお金足りないの。お姉ちゃん、どうしよう？」

「んー、それなら残りのお金はあなたにあげる。その代わり、私がまた来た時もう一度お花をくれる？」

「うんっ！！」

少女は満面の笑顔で頷いた。

「さ、行きましょ」

リーラは待っていた男に声をかける。

「お前さ金欠じゃなかったのかよ？」

男はニヤニヤと笑っていた。

男は知っている。

リーラのポケットの中で銅貨や銀貨がジャラジャラと音をたてていることを。

彼女はあのアジェットという男をお人好しと言ったが、彼女自身も彼に負けていない。

だから男は言ってやった。

「まったく、お人好しが」
「うっさい」
リーラは先程少女に向けたような優しい笑顔ではなく、いかにも不機嫌そうな顔をして先へ進む。
「おい！！　そこのもの止まれ！！」
またも行く先を止められた。今度は野太い声で。
不機嫌そうな顔でリーラは振り向く。
「何？」
その顔に騎士は一瞬怯みよろめいたが、なんとか踏みとどまった。
「その服装で！！　お前が旅人であることは分かっている！！」
「だったら何よ！？」
隣であたふたとしている男とは違いリーラはかなり強気で、浮かんでいる表情は先程とは真逆で、鬼のような形相である。
今にも噛みつかんばかりの勢いだ。
「だっ、だから……」
「だから何よっ！！　男ならはっきりしゃべりなさい！！」
「少しばかり前に我々が拘束した男にはこの都に入ってきた時には連れがいたらしい。それで今、旅人を探していたのだ！！」

「で？　その旅人は私だと？」
「ま、まだ分からんが」
「なら、邪魔しないで！！　私はあんたと違って急いでんのよ！！」
「あ、ああ」

リーラはくるっと騎士に背を向けて歩いていく。
この時、となりであたふたしていた男は思った。
テンションって恐ろしい。と。

「おい、何やってるんだ！？　捕まえんか！！」

リーラに怒鳴られシュンとなっている若い騎士に、中年の騎士が怒鳴りつける
。

「は、はい！！」

若い騎士がリーラと男を追ってくる。
男は思い直した。
やはり、現実は甘くなかった。と。

「チッ、ほんっと、鬱陶しいわね！！　いいわよ、相手して上げる」

気の弱い男なら目が合っただけで卒倒しそうなドスの利いた目でリーラは若い
騎士を睨みつけて、剣を抜く。

「うっ！？」
「５秒で終わらせる」

リーラは不機嫌そうに断言した。

黒い魔道士さんと透明な神様の楽園　第二話（後書き）

感想、評価等くださると嬉しいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7734v/

黒い魔道士さんの物語

2011年8月15日13時21分発行